

日本が世界に発信できること

上柴中学校 3年 新井遥貴

「What Japanese anime do you know?」

「Oh, “Your name”.」

これは、私たちが修学旅行中の課題として行った、外国旅行者の方へのインタビューだ。何か日本のアニメを知っているか、という質問に対して、外国の方は、新海誠監督の作品「君の名は。」を挙げてくれた。他にも、日本でいちばんの思い出や苦勞したことなどを教えてもらった。それをきっかけに私は、日本から世界に発信しているものは他にどんなものがあるかを考えた。

今年、ロシアでサッカーワールドカップが開催された。日本代表は、世界ランク60位ながら、まさに下剋上のパフォーマンスを繰り広げ、グループステージを突破し、その健闘は世界から賞賛された。しかし、注目されたのはそのプレーだけではなく、選手やスタッフ、サポーターのマナーにもあった。試合後、選手やスタッフはロッカールームをきれいに清掃し、サポーターはスタジアムの応援席のゴミ拾いをして帰った。これが世界中で話題になった。「美しくしよう」という日本人の心が世界に認められ、世界各国のサポーターへと取組が広がっていった。特に注目されたのは、試合に敗れ、がっくりと肩を落とした後も、気持ちを切り替えて最後まで清掃を行ったことである。アメリカのニュースでは、「負けても彼らの素晴らしい精神は無くならなかった」と日本のサポーターの姿を讃えた。私は、それを嬉しく誇りに思ったと同時に、自身の学校生活での生かし方も考えた。

清掃に焦点を当てて考えると、毎日の掃除が大切だ。私たちの学校では「全力清掃」を目標に活動をしている。また、生徒会活動の一貫として、「ピカイチ」という、一生懸命清掃に取り組んでいる人を選出し、讃える取組を行っている。選出されることは手段の一つであって、目標ではない。しかし、自分たちの学校を誇りに思い、自分たちの力できれいにする気持ちを広げるきっかけに「ピカイチ」がなればと思う。私はまず、自ら率先して清掃を行いたい。ただきれいにするだけでなく、「気づき」と「感謝」の気持ちを今よりもっと鍛えたい。

日本が世界に発信できることは、それだけではない。世界で唯一の被爆国として、日本が中心となって平和を考えていかねばならない。私たちは修学旅行で広島にも足を運んだ。平和記念資料館で展示されていた中学生の制服は、皮膚をも焼き尽くしたかのようにボロボロだった。それまで人の話や本や映像の中でしか知らなかった戦争を目の当たりにした。戦争から73年経った今でも苦しんでいる人がいる。毎年、亡くなる人がいる。戦争がどんなに悲惨なものか、多くの命を今でも奪い続けている事実、私は言葉を失った。「平和」について考え続け、世界に、そして後世に私たちは伝えていく使命がある。

人々を苦しめるのは自然災害も同じだ。ここ数年、毎年のように災害が起き、多くの方が家を失い、家族を失い、生きていく希望をも失いそうになっている。テレビのニュースなどで被災地や被災者の様子を見るだけで、私も苦しくなる。私たちにできることは多くない。黙祷で祈りを捧げるとともに、募金活動など、できることからやっていきたい。誰かがやるのではなく、自分から。ボランティア精神を忘れず、国内外に目を向けて携わっていけるような人でありたい。

2年後には、東京でオリンピック・パラリンピックが控えている。インタビューで外国の方は、日本語が難しいと言っていた。高校2年生となる2年後、外国からの観光客に英語で対応できるようにしたいところだ。笑顔でコミュニケーションをとり、おもてなしの心を発信していきたい。世界に誇れる国、日本。私は日本を本物の「美しい国」にしたい。

理想の自分

幡羅中学校 3年 金内 結美

私は小学生の頃、本がとても好きでした。まるで自分が物語に出てくる主人公のような気分になれるし、誰にも邪魔されない世界に魅力を感じていました。小学四年生になったばかりの頃、私は一冊の本を読みました。『はだしのゲン』という作品です。初めてこの本を読んだとき、私は大きな衝撃を受けました。思わず目を背けたくなくなってしまうようなシーンがいくつもいくつもありました。そして、物語を通して戦争の悲惨さ、恐ろしさを知りました。そして、「もっと戦争のことを知りたい。知らないままではだめだ。」と思うようになりました。

そんなとき、私は一人の先生に出会いました。その先生は、小学校で ALT をされていた外国人の先生です。先生は明るく、気さくで、みんなから愛されていました。私も、そんな先生のが大好きでした。ある日英語の授業で見たビデオに衝撃を受けました。海外で貧しい生活をしている子供たちを特集したものでした。戦争で足を失った子供、親を失った子供、路上で生活をしている子供。過酷な環境下で必死に生きている子供たちがいることを、初めて知りました。私と近い年齢の子供たちが、こんなに苦しんでいるのかと胸が押しつぶされそうでした。と同時に世界で起きていることを知っていながら何もできない自分をとても腹立たしく思いました。

「自分が大人になったら世界中の子供たちを救ってやる！」そう決心しました。そのために私は先生に「どうしたら、このような子供たちを救うことができますか。」と尋ねてみました。すると先生はにこっと笑い、たくさんのことを教えてくださいました。先生自身が貧しい子供たちを支援していること。目の見えない子供や施設にいた子供を養子として育てていること。驚くことばかりでした。先生は優しいだけでなく行動力もあり、たくさんの子供を救っていることを知ってますます尊敬しました。

そして小学6年生の冬、私は先生にあることを勧められました。それは「深谷国際塾」に行くことです。「深谷国際塾」とは私と同じような夢を持っている人が集まって、色々な国の ALT の先生と会話をしたり、施設見学に行ったりする団体です。最初は知り合いが誰一人おらず、どこの輪にも馴染むことができませんでした。先生はそんな私を気にかけてくださり、笑顔で「ファイト！」と言ってくださいました。先生の優しさに触れ、自分も先生のように誰かを勇気づけられるような人間になろうと改めて思いました。

私は「深谷国際塾」で、一人の小さな男の子の写真を見ました。その写真にはセリフがついていて「希望はない。未来もない。」と書いてありました。私は、写真の前から動けなくなるほど衝撃を受けました。今までに体験したことがないほど胸が「ぎゅっ」としめつけられました。こんな小さな男の子が、将来の夢も、明日の希望さえも持てないのです。そして、この子から笑顔も、未来も奪ったのは戦争なのだ、と先生の話思い出しました。子供たちの笑顔を取り戻すために自分に何ができるのかを考えたとき、先生の優しい笑顔が頭に浮かびました。

「先生のように優しく、強い人間になりたい。」そう思いました。

私は将来、海外へ行き、世界中の子供たちが夢を追いかけられる環境を作りたいです。他国の人と同じ言語を話し、人生を共有することは決して簡単なことではありません。しかし、私が先生に夢を与えてもらったように、私も子供たちが「夢を叶えたい！」と思える原動力になりたいと思っています。

すべての子供たちの希望が、未来が、光り輝く世界のために！

「大人」への第一歩

明戸中学校 3年 加藤 友美

「子供から大人になるのはいつなのだろう。」

私がこう考えるようになったのは、六月に部活を引退し、自分の進路について考えるようになってからです。私は今、中学校三年生で、二月には高校受験をします。無事に高校に合格したら、三年間高校生活を送り、大学受験をします。四年間の大学生生活が終わると、就職活動をし、社会人になります。私は、この過程の中で、いつ子供から大人になるのだろうという疑問を感じました。私は、母に「欲しいものは、大人になってから自分で働いて買いなさい。」と、言われたことがあります。では、いつ大人になるのか、とじっくり考えてみました。

ある日、何気なくテレビを見ていたら、あるニュースが目にとびこんできました。それは、民法の改正により、二〇二二年四月から成人年齢を二十歳から十八歳に引き下げるというニュースでした。私は、このニュースを見て、驚く反面、少し嬉しくなりました。なぜなら、私は、成人年齢を二十歳から十八歳に引き下げることについて賛成だからです。日本には、二十歳になると成人という決まりがあります。でも、「二十歳」というと、順調に入学できたら大学二年生です。高校三年生や大学四年生なら、まだきりがいいですが、大学二年生は、少し中途半端な感じを受けます。私はそのことを疑問に思い、成人は十八歳にするべきだと考えていました。

私がそう考える理由は、選挙権が十八歳以上で取得できるからです。選挙権も、つい何年か前までは二十歳以上でしたが、少子高齢化により、十八歳に引き下げられました。でも、「選挙」というと、堅苦しいイメージがあります。十八歳になったからといって、ただ単に選挙権を与えるだけでは、政治に興味・関心のないまま、投票してしまう可能性が大いにあります。そのため、高校生有権者に政治に興味を持ってもらえるようなテレビ番組や、イベントなどが各地で行われているそうです。そうすることにより、一人一人が政治に関心を持ち、多様な意見をじっくりと検討し、積極的に政治に参加していくことができるはずです。また、選挙権以外にも十八歳になったらできることが増えてきます。例えば、社会に出て働くことができ、運転免許を取得することができ、結婚して家庭を持つこともできます。つまり、一人の人間として生活していく上で自立できる年齢であると言えます。また、ニュースでよく見る世論調査のアンケート結果で「どちらともいえない」と答える人が多くいますが、私達が十八歳になったときにしっかりと自分の意見をもって行動し、成人としての責任と自覚を持つことが大切です。だからこそ、今、中学生であるからこそできる様々な体験に思い切って挑戦したり、自分の目標に向かって一生懸命に勉強することが必要だと思います。

この理由から、私は成人年齢を十八歳にすることに賛成です。ですが、成人年齢が下がるということは、その分、一人一人の責任も大きくなります。私は、「成人する」ということは、大人としての自覚と責任を持ち、自分で自分の人生を切り開いていく節目だと思います。そして、私自身も成人をむかえるにあたって、色々な準備や心構えが必要です。例えば、社会のルールをしっかりと守ることや、自分自身の将来についてよく考えること。また、十八歳の人達に成人したら大きく変わることにについて、もっと深く考える機会を積極的に設けていくべきだと思います。成人するまでの時間は限られています。だから、私は時間を大切にしていかなければならないと思います。時間を大切に一日一日を過ごせば、自然と毎日が充実していくからです。そうした努力を続けることで、自覚と責任が生まれ、大人になるための第一歩を踏み出すことができると私は思います。

戦争が消える日を願いながら

豊里中学校 2年 猪野 晃平

不安定な世界情勢。今もどこかで戦いが起こっています。

六月、ドナルド・トランプ大統領とキム・ジョンウン委員長の米朝首脳会議が行われました。会談は友好的に終わり、北朝鮮への不安が少し和らぎましたが、世界にはまだまだいろいろな問題があります。その中でも僕は人権について着目しました。どのような人権問題があるのでしょうか。いじめや差別。なくなることのない人権問題。その中で僕は「戦争」が最悪な人権侵害だと考えています。

戦争は、人と人が殺し合いをします。原因が何であれ人と人が殺し合いをするのは許されるべきことではありません。

世界には、今もなお戦争や紛争が続いています。戦争は人の命だけでなく、人の夢や希望なども奪ってしまいます。

僕は以前に、ユニセフの募金を呼びかける手紙をもらったことがあります。「あなたの夢は何ですか？」と世界中の子供たちに聞いた答えが書いてありました。その答えの中には住んでいた村が突然おそわれ、両親はピストルで撃たれ、村は焼かれて自分一人命からがら逃げた男の子のものがありません。

「生きていたい。それだけが夢。」

という言葉でした。僕はその言葉に心を痛めました。

僕たちは日本という平和な国に住んでいて「明日は何をしよう。」などと絶対に明日も生きているという確信があり、それを当たり前のように過ごしています。しかし、世界には「明日は生きていられるか。」

「今日は生きていけるか。」と毎日死と隣り合わせで生きている人も大勢います。このような人たちが暮らす国は戦争が大きく関わっています。

戦争は人の命を奪うだけでなく、亡くなった方の家族や国民が苦しい思いをします。

ユニセフの募金を呼びかける手紙にはこんな子のことも書かれていました。

「大切な友だちは爆発で死んでしまい、そして、わたしは片足を失いました。出かけても無事におうちに帰ってこられるそんなふうに思える日がもう一度来てほしい。」と。

この子の国は戦争が七年も続いていて町の建物はみんな壊されているそうです。国が勝手に始めた戦争に国民も巻き込まれる。国は人を殺してはいけないと言っているのに国がそれを指示する。国は国民を守らなければならない立場なのに国民を犠牲にする。そんなことをしていたら国民の人権は守られません。

日本は今戦争をしないとっていますが、過去には何度も戦争を起こしてきました。世界中を巻き込んだ第一次、第二次世界大戦、この二つの戦争での死者数は千七百万人を超えました。

多くの人が命を失いました。その人たちは命も奪われたのに、「自分の人生は幸せだ。」と言えるのでしょうか。今日本に住んでいる人は僕を含めてきっと幸せだと感じている人が多いでしょう。

しかし、戦争で人を殺してしまった人は罪悪感を持ってしまうと思います。殺された人は残してきた家族を心配する気持ちや生きて帰れなくて申し訳ないという気持ちを持つということを、以前、テレビのドキュメンタリー番組で見たことを記憶しています。本当にその人たちの人権は守られたのでしょうか。

祖父に戦争について聞いたとき、自分が生きることに精一杯という時代だったそうです。

戦争は人の命、夢、希望、平和を奪い、亡くなった人の周囲の人までもが苦しみます。失うものは大きいですが得るものはない、戦争は誰も得をしない人と人が殺し合うだけの悲しいものです。

僕は、世界から「戦争」という言葉が消える未来が来ることを強く願い、実現に向かって努力できる強い心と健全な体が持てるよう成長していきたいです。

心の支え

岡部中学校 2年 菊池 慎志

明治から大正にかけて活躍し、「日本の資本主義の父」と呼ばれた事業家、渋沢栄一翁。私達の住むこの深谷で生まれ育ち、生涯で約 500 の企業に関わり、約 600 の社会事業に携わりました。「夢なき者は理想なし」で始まる「夢七訓」は、深谷市の小中学生なら誰もが知る、渋沢栄一翁の教えですが、他にもたくさんの教えを残しています。

「どんなに勉強し、勤勉であっても、上手くいかないこともある。これは機がまだ熟していないから、ますます自らを鼓舞して耐えなければならない。」

現在、中学 2 年生の私は、生活の中心が「野球」です。部活動ではなく硬式野球のクラブチームで野球に打ち込むことを、自らの意思で選択しました。「甲子園に行きたい」「プロ野球選手になりたい」という思いがあったので、早くから硬式野球に慣れたかったのです。しかし、硬式の野球ボールを扱うのは思った以上に手強く、少しのミスが怪我につながりました。また、肩や肘への負担も大きく、1 年生の頃は、怪我で投球を休まなければならない時期もありました。私の所属するクラブチームには、土、日、祝日の一日練習に加え、平日の夜練習もあります。同時に中学校の部活動は「陸上部」を選択しているので、毎日朝練習にも参加しています。そして、もちろん中学生ですから、「勉強」も手を抜けません。提出物に宿題、生徒会活動と睡眠時間を削って尽力してきたつもりです。

そんなめまぐるしい毎日で、「野球」「陸上」「勉強」そろそろどこかで報われる結果が出てほしい頃なのではと思っているのですが、まだ、私には明るい兆しが見えません。ところが、周りのチームメイトは良い結果を出し、成長を遂げ始めているのです。正直にいうと私には焦りがあります。不安でもあります。すべてを投げ出し、楽になってしまいたいと思うことも多々あります。そもそも人間が勝負をしたり、一番を目指したりすることに意味はあるのでしょうか？例えば「高校野球」、優勝するためには鬼のような「走り込み」「素振り」が必要です。同じようなミスを繰り返せば当然監督に怒られるでしょう。「自分には無理なのは・・・」というネガティブな考えになることがあります。これも野球をしていなければ、経験しなくて済むことなのです。それだけ私は焦りともどかしさでいっぱいなのかもしれません。

そんなとき、私は、ふと思います。今、栄一翁に人生相談をしたとしたら、何と言われるのだろう。栄一翁の本にこんな言葉が書いてありました。「機がまだ熟していない。ますます自らを鼓舞して耐えなければならない」と。きっとこんな解答をされるでしょう。この言葉を初めて見たときはピンときませんでした。今、私の中では、この言葉がまさに今の自分に必要な言葉だと感じているのです。肉体的にも、精神的にも厳しくて逃げ出したいようになっていた私を引き締めてくれる言葉です。この先、もしかしたら私には機が熟すときは訪れないかもしれませんが。それでも私にも機が熟すときが訪れることを信じて、丁寧に中学校生活を送っていきたくと今では思うようになりました。栄一翁の言葉を心の支えとし、自分が報われないことに目を向けるのではなく、自分と未来を信じて耐える力を身につけていきたくと思います。そして、いつか耐え抜いた姿で、また栄一翁に相談をしたいものです。

「夢は人を変える」

川本中学校 3年 渡邊 眞己

いきなりですが、皆さんに質問です。皆さんはいつから夢を持っていますか？多くの人が幼稚園や保育園の時には夢を持っていたのではないのでしょうか。実際、私も幼稚園のアルバムには「プリキュアになりたい。」と習ったばかりの字で、大きく書いてありました。

では、少しレベルを上げた質問をします。皆さんは夢を叶えるために、いつから行動し始めましたか。中学3年生になった今の私の夢は、水族館の飼育員になることです。「プリキュアになることはできないのだ」と、小学校に入学した頃には、私にもわかりました。それからというもの、誰かに「夢」を聞かれると、なんて答えたらよいかわからず「夢なんてないよ」と口にしていました。将来の私がどんな大人になっているのか想像することができなかつたのです。

中学校に入学し、本格的に進路学習を始めた頃に訪れた水族館。色とりどりの魚が行き交う海中トンネルをくぐり抜けた私の目に飛び込んできたのは、20羽以上のペンギンの群れに囲まれた女性の飼育員の姿でした。一羽一羽に向かい合っている、優しさにあふれたまなざしに、私は釘付けになりました。「この仕事だ。この仕事をやってみたい」と夢が膨らんだ瞬間でした。

意気込んで調べてみると、大学や専門学校で生物学や海洋学など専門的なことを学び、水族館の採用試験に合格しなければならないことがわかりました。しかも、定期的な採用は、非常に少なく狭き門であることも知りました。現実を知ることで、今の私が、やっておくべきことがみえてきました。まず学力を身につけること。そしてチームで飼育していくために必要とされるコミュニケーション能力を高めることだとわかったのです。

今までの私は転校生ということもあり、周りに遠慮して「もっとこうしたらよいのに」と思う時も、言葉を心に閉じ込めていました。自分の一言で、周りが波立つのが怖かつたのです。自分から意見を言うことは極力避けてきました。しかし、目標を定めた私は、このままではいけないと気づいたのです。自分の夢を叶えるためには、「自分の考えを上手に伝える力をつけなければならない」そう理解はしたのです。が、行動に移すことはとても難しいことでした。

2年生に進級した私は、音楽係だったので合唱コンクールの実行委員になりました。初めは、義務感から頼まれた仕事をこなしていました。しかし、練習をしていくうちに、このクラスなら人を感動させるような合唱ができるのではないかと思うようになったのです。「自分の思いをみんなに伝えたい」でも、言葉にするのはとても勇気が必要でした。3年生になった今でも、放課後の音楽室でみんなの視線を受け止めながら、声を震わせ自分の思いを語ったあの日を、まるで昨日のこのように思い出せます。この経験は、私の学校生活を大きく変えてくれました。自分に夢ができ目標を持ったことで、私は自分を変える一歩を踏み出すことができました。

今まで私は、渋沢栄一翁の「夢七訓」を意識したことなどあまりありませんでした。しかし、振り返ってみると、自分の夢を持つことで、私の学校生活は大きく変わりました。やはり、夢を持つことは大切なのです。中学生の皆さん、夢を持ちましょう。そして、明るい未来を自分の手で作っていきましょう。

これからの世界に必要なこと

花園中学校 3年 田沼 歩莉

「1000分の180」

皆さんはこの数字が何を表しているかわかりますか。この数字は5歳の誕生日を迎えられずに亡くなってしまふ、アフリカの子どもの数です。医療の発達していないアフリカでは千人の赤ちゃんが生まれても、180人が5歳になる前に死亡しています。これはおよそ5人に1人です。では、日本ではどうでしょう。日本ではこの数字はわずかに3人です。

私はこのような現実を知るまでは、日本のような国が当たり前だと思っていました。しかし、教育や進んだ医療サービスが受けられるのは、世界でたった20%にも満たないのです。他の80%以上の国の人々は、飢えや病気、貧困に直面した毎日を過ごしています。「ぼくがお金持ちだったら、家のない子ども全てに衣食住と優しさ、愛情をあげるのに。」教科書に載っていたストリートチルドレンの言葉に、私は息を飲みました。私が最近お金を使ったものといえば、お菓子や飲み物、筆記用具など、自分のためのものしかありませんでした。貧しい国の小さな子どもが、もし自分に少しでも富があったなら、それを他人と分け合って使おうと考えているこの言葉に私は衝撃を受けました。裕福な日本に住み、不自由なく生活している私たちは自分のことしか考えていないようです。

貧困などで苦しんでいる国の人々に、今一番必要なものは何でしょう。食べ物や水でしょうか、お金でしょうか。私は英語の授業で友達と討論しました。最初は食べ物ではないかと思いました。しかし、話し合っていく中で、私たちは技術という結論に至りました。食べ物や水、お金はいつまでもあるとは限りません。しかし、技術は世代を超えて継承されます。農作物を作る、井戸を掘り水を得る技術などがその例です。このような技術を伝えることが重要となるのではないのでしょうか。私は将来、技術を伝え、世界中で共有できるようにしていきたいと思います。そのためにはコミュニケーション能力が不可欠となります。

8月に市内の学校の生徒代表が集まり、各校の活動について話し合う生徒協議会が行われました。そこで私が学んだことは、相手の気持ちに共感し、意見を認め合うことの大切さです。また、自分の意見をしっかり主張したり、代案を出したりすることの必要性も学びました。学年も性別も違い、学校の環境も違えば、実に様々な意見が出ます。その多様な意見を簡潔にまとめ、その場にいる全員に的確に伝わるように発表するといった難しさも感じました。グローバル化が進む現在、世界規模で、私が感じた難しさをはるかにしのぐ難しさを多くの人々が実感することになるはずです。人種や宗教、生活環境、気候風土から様々な考え方が表れます。そのために私たちは、相手の意見を認め、尊重できるコミュニケーション能力が必要になります。進んだ技術を発展途上国の人々に伝えるために、コミュニケーション能力もグローバル化していかなければなりません。

私には国際薬剤師になるという夢があります。そして、願いは日本の優れた薬学の技術や知識を世界中に広めることです。病気や貧困に苦しんでいる国の人たちが日本で簡単に治せる病気で、命を落とすことのないこと。そして誰もが、平等で安全な医療などのサービスを世界中のどこであっても受けられるようになること。そんな日が近い将来、世界中に訪れることを願っています。そのために、私は今、私にできることを精一杯努力し、コミュニケーション能力を身につけ、国際薬剤師を目指しています。

英語の必要性

東京成徳大学深谷中学校 2年 新井 祐羽

私は英語の勉強をしているとき、「なぜ英語を習得する必要があるのか」と疑問に思ったことがあります。ヨーロッパなどの英語を公用語にした国や、海外の人の出入りが激しい地方なら、たくさんの人が英語を話す必要があるということにも納得がいきますが、日本のように英語以外の言語が公用語であり、ほとんどの人が毎日日本語でコミュニケーションを取っている国で、なぜ英語を習得する必要があるのか不思議に思っていました。

日本語だけが使える場合、コミュニケーションを取ることができる人の数は世界人口の約2パーセントしかいません。しかし、英語を話すことができるだけで、その幅は約25パーセントにまで広がります。このように、英語はたくさんの人とコミュニケーションを取るために必要なものです。海外へ旅行に行くときや、外国の人と会話をするときには日本語だけでなく英語を話すことができれば自由に行動でき、自分の意見を主張することもできます。

また、インターネットでは、英語で書かれたサイトなどからたくさんの情報を得ることができますし、もちろん、SNSなどでやり取りをすることもできます。英語で書かれた小説や、英語で翻訳された本も、読んでみれば今までとは違う世界観を楽しむこともできるかもしれません。

さらに、自分のやりたいことが、英語を習得することによってできるようになることもあります。例えば日本語を英語、英語を日本語へと翻訳する翻訳家や、大学や日本語学校で外国の人に日本語を教える日本語教師などの仕事は高い英語力が必要です。他にも、近年コストを抑えるために海外でホームページの作成を行うことが増えていることから、英語を話す必要性が高まってきているシステムエンジニアなどもあります。これらの仕事に就くにはもちろん技術や知識も必要ですが、それ以上に必要となるのが英語なのです。どれだけやる気や能力があっても、英語を使えないことにはコミュニケーションやできることの幅が狭まってしまうからです。

英語には他にも、日本から海外へ、文化や流行を発信できるという面もあります。例えば、日本の食文化やマンガ、アニメなどが、近年世界で注目を集めています。最近ではインターネットが普及し、たくさんの情報を得ることができます。しかし、海外の人は日本のメディアを見ることはできても、そのほとんどが日本語で書かれているため、中身を理解することは困難です。そのため英語を学び、海外の人により理解してもらうことと共に私達が他国の考え方や文化の違いなどを理解し、良いところをたくさん見出すということも重要だと考えました。

2020年には東京オリンピックが開催され、世界各国からたくさんの人が日本へ来ると考えられています。その時、旅館や店舗などの接客業はもちろん、私達も道で外国の人たちと会話をする機会があるかもしれません。その時に英語が話せれば人の役に立ったり、交流することができたり、日本の魅力について相手に伝えることができるかもしれません。そうしたことから、今英語を学ぶことは、日本人である私達にとっても、広く考えてみれば日本の未来にとっても、とても大事なことだと感じています。これらのことから、英語を学ぶことは私達にとっても重要であり、且つ、有意義なことなのです。

では、その英語を学ぶのはいつが最適なのでしょう。社会人になって必要になり、英語を学び始めるのも悪くはありませんが、今、私達には英語を学べる環境が整っており、英語を習得することが充分可能になっています。私は、英語は試験科目の中で一番実用的な教科なのではないかと考えています。勉強を中心として生活することができる学生の中に英語を習得できることは、とても幸せなことであると感じました。これからも英語をたくさん勉強していきたいです。

本当の平和とは

深谷中学校 3年 榎 優衣

「わたしはもう助かりません。もう、だめ。だからあなたは、どうしても逃げてちょうだい。」

この言葉は、私にとって忘れることのできない一言になりました。今でも、この言葉を思い出すと、心を何かで突き刺されたような感覚になるのです。

私は、広島に原爆が落とされたときの実体験が綴られた「わたしがちいさかったときに」という本の中で、この言葉に出会いました。

昭和二十年八月六日、広島に世界で初めて原爆が落とされました。一晩で何万もの人が亡くなり、街は壊滅状態、誰も見たことがない、地獄とはきっとこのようなものだと思いが、そんなヒロシマの光景だったといわれています。

原爆によって家が壊れ、妻が倒れた柱に足を挟まれてしまいます。夫は必死に助けようとしますが、火の手はどんどん迫ってきます。妻は「子供のために逃げなさい」と夫を諭しました。号泣しながら夫は、妻の元を離れていきます。振り返ると家はすべて火の海に飲み込まれていました。子供を助けるために妻を火の海に残して逃げる、そんな決断を強いられたとき、人はどのような気持ちを味わうのでしょうか。苦しみ、悲しみ、怒り…。私の知っているどの言葉でも、その気持ちを言い表すことはできません。

被爆体験をした子供たちが、思い出すのもつらい、そんな気持ちを持ちながら書き残してくれた話を読みながら、今私たちが過ごしている日々がいかにかに平和で幸せなのかを知りました。きっとこの子供たちも、今私たちが過ごしているような、戦争のない平和な世の中で暮らすことを望んでいたはずです。この本は、私たちに戦争のつらさや平和の大切さだけでなく、本当の平和とは何なのかを考える機会を与えてくれました。

私たちの故郷、深谷市にも反戦平和を望んだ方がいました。渋沢栄一翁です。彼は、日米関係が悪化するなか、争いを鎮めようと四回にわたって渡米しました。排日運動が起こる中で、未来を担う日米の子供たちに親善の輪を広げようと、人形を交換する活動を行ったのです。栄一翁は生前、「また必要があれば、自分は棺を船に乗せて再び渡って参ります。」と言いきったのだそうです。国どうしが対立しているなかで、友好関係を築くことは、そう簡単なはずがありません。日本だけを見つめるのではなく、世界を見すえ、平和を次の世代に引き継ごうとして、苦難を承知で活動を続けた栄一翁を、私は誇りに思います。

私たち中学生は、戦争を体験したことはありません。

言葉が人に与えてくれるもの

南中学校 3年 正田 彩七

あなたは、今、発言しようとしたその言葉の意味をちゃんと知っていますか。その言葉で、相手がどんな気持ちになるのか、考えたことはありますか。「言葉の重み」を理解していますか。

今、日本をはじめ、たくさんの国でインターネットを簡単に使える時代になったと思います。スマートフォンなどの情報機器を持っている人がほとんどだと思います。アプリでゲームをしたり、動画を見て楽しんだりできるとても便利なものですが、その中でも、ツイッターやフェイスブック、ラインなどといった”SNS”がとてはやり、今では、生活の一部だという人も多いのではないのでしょうか。このように、自分の考えや言葉を自由に発信できるようになった今、「言葉の重み」というものを考えていない人が多いのではないかなと感じます。

例えば、ラインを使ったいじめなどです。とても便利で、私の両親や兄も利用しているラインですが、間違った使い方をすると人を簡単に傷つけてしまう凶器にもなると、何度も教わりました。私は、ラインを利用していないため、実際に体験したことはありませんが、ニュースや再現ビデオなどでその様子を見たとき、鳥肌がたつくらいぞっとしました。みんなが、あたり前のように「死ね」とか、「消えろ」などと言ったりするそのトーク画面を見たとき、驚きと、そこしれない恐怖がおそってきました。同時に、平気でこんな言葉を発信できてしまう人たちに、疑問をいただきました。「消えろ」というこの三文字にどんな意味があるのか、その言葉は、人をどんな気持ちにさせるのか。「死ね」という言葉で、本当に自殺を選んでしまう人もいるという現実を想像したことがあるのだろうか。そんな考えが頭に浮かんできました。言いたいことを一文字ずつタップすれば簡単に表すことのできるスマートフォンはとても便利だけれど、その手軽さが、言葉の重さを考えない人が多くなる原因だったり、言葉の意味をうすく、軽くとらえる要素の一つだったりするのかなと思いました。

言葉は、意味や重さを理解しないで使うと、人を不快な気分させたり、傷つけたりしてしまうことがあります。ですが、逆に、人を勇気づけたり、嬉しいと感じさせたりすることもできます。「がんばれ」や「ありがとう」という言葉は、つらい人を支えたりすることができます。私は、そんな言葉を多く使える人になりたいです。私も、言葉の意味や重さを考えず、「バカだなあ」などと相手に対して、言ってしまうことがあります。そんなとき、少し、考えようと思いました。この言葉を言ったら、相手はどんな気持ちになるのか、自分は軽い気持ちだったとしても、相手に誤解を与えるような言い方になっていないか、自分で少し考えてから発言しようと思いました。

言葉は偉大であると私は思います。たった二文字や三文字で、人を傷つけることも、人を勇気づけることもできる「言葉」は、とても影響力のあるものだと思います。私は、そんな「言葉」で、人を勇気づけられるようになりたいです。一人ひとりが、相手に言葉をかけるとき、その言葉の意味や重さを考えられるようになったら、いじめも、誰かが傷ついて、苦しむこともなくなるのかなと思いました。

将来の夢

藤沢中学校 2年 渡邊 春奈

「将来の夢」と聞いて、あなたはどんなことを思い浮かべますか。私は、大人になったときにこうでありたいという理想の自分はどんな人なのかを思い浮かべます。

一言で「将来の夢」と言っても、保育士や教師といった就きたい職業や、優しい人、責任感のある人といったこんな大人になりたいという理想など様々ですが、ほとんどの中学生は将来の夢を持っています。一方で何らかの事情により将来の夢を持つことができずに日々生活している人もいることを新聞で知りました。

戦争が起きている国の少女に、日本人記者が将来の夢についてインタビューをしたときの会話です。

「将来の夢は」

「ないよ。そもそも大人になれるかなんて分からないから…。」

と少女は答えています。

絶対に大人になれるという人はいないけれど、毎日毎日近所に爆弾が落とされていたら、誰だって将来の夢を持つことはできないと思います。将来の夢を持つと言うことは当たり前のように、当たり前ではなかったのです。しかし、戦争という大人の勝手な事情により、将来の夢を奪われる子どもがいていいはずがありません。今すぐ戦争をやめるべきです。そのために私も何かをしたいのですが、今の私にできることは募金活動に参加することぐらいです。自分でできることは少しずつ増えてきましたが、人のためにできることは、ほとんどないという自分の無力さに情けなくなります。だから私は人のために努力をし、行動できる大人になりたいです。

私が将来就きたい仕事は「医師」です。理由は、たくさんの人の命を救いたいからです。今まで日本の病院に勤めたいと思っていましたが、今は戦争が起きている地域へ行き、怪我をした人を助けたいと思っています。怪我をした人を助けることだけではみんなの夢を守ることはできないし、私一人がんばったとしてもほとんど変わらないことは分かっています。しかし、何もしなければこの現状は変わることはありません。例え一人一人の力は小さくてもたくさんの人の力が集まれば大きな力になります。だから自分にできることを精一杯していきたいです。私は人のために努力をし、行動できる大人になりたいです。そのためにがんばりたいことがあります。

その一つは、「知る」ということです。今回、戦争に巻き込まれている少女のことを知ることで私の価値観が大きく変わりました。このように身の回りのことはもちろん、世界について知ることで自分の価値観が大きく変わったり広がったりします。そのことは、人間力を高めることに直結するはずですが。

2つ目に、「伝える」ことです。「知る」ことも大事だと思いますが、知ることだけでは人のために行動したとは言えません。例えば、募金活動について知り、それを基に考え、みんなに伝えていくことで誰かの役に立つことができると思います。

そのことは行動力の上昇に直結するはずですが。

3つ目に、「自分を高めるために努力する」ことです。いくら人のために尽くそうとしても、しっかりと自己管理ができないと、思うように活動ができないと思います。そこで挨拶、掃除、靴そろえなど、当たり前のことを当たり前にするよう意識して生活し、自己管理能力や責任感などを高めていきたいと思っています。

そして、人のために努力して行動できる人になり、医師としてたくさんの人の役に立つ活動をする。それが私の将来の夢です。